

家族の絆きずな

## 読み聞かせの記憶

小学校の頃は病弱でしたから、学校を休む日がずいぶん多くありました。その時、母は枕もとで本を読んでくれました。あの大きな戦争、日中戦争が始まる少し前、今から七十年ほど前のことです。昔は現在のように、本はたくさん出版されていませんでした。

「聖書物語」「アンデルセン童話集」「宮沢賢治童話集」これらを何回、いや何十回も読んでくれました。

キリストが十字架を背負ってゴルゴダの丘を登っていく姿、「よだかの星」「みにくいあひるの子」「雪の女王」布団の中で震え、涙をこぼしました。今でも、あの母の声、物語の中の登場人物、筋、様々な場面を鮮やかに覚えていきます。

本が好きになったのは、母の読み聞かせのおかげです。

おとなになって、学校に勤めるようになりました。朝会では子どもたちに童話を読んでやりました。入学したばかりの幼い一年生に、日本昔話を聞かせたこともあります。緑の木陰で一時間近く、私語も交わさず、眼を輝かせていたあの幼い姿を今も懐かしく思い出します。

中学校では、卒業間近の三年生には、宮沢賢治の「よだかの星」を読んでやりました。途中で、私は声をつまらせ、泣いてしまうのでした。生徒たちの眼にも私と同じように涙がありました。この人たちの幾人かと、担任ではなかったのに親しい交

わりが今でもあります。

幼少の頃とおとなになってからの本の読み方、受け止め方、当然差はありましよう。しかし、すばらしい本から得られる感動に質の差はないでしょう。その感動が人間の心を美しくし、優しくしてくれるのです。老人である私も、こうして少しづつ、さらに優しくなっていくように思います。

すばらしい作品を何度も何度も読みかえす、すると、その度ごとに新しく感動する。自分では、はつきり気付かなくても、心が豊かになっていくのです。

今私の傍らには、母の読んでくれた、「アンデルセン童話集」「宮沢賢治童話集」文語体の「新旧約聖書」があるのです。

大平町 若菜 貴

## 一冊の本から

それは、ほんとうに偶然の出会いでした。もう三十年も前のことです。

わたしたち夫婦は、東京に出かけた土産にと、小学生の息子に一冊の本を買いました。二人で選んで、そのタイトルが息子にピッタリだと考えた本は、「六人の探偵たち」という、イギ

リスの作家アーサー・ランサム全集の一冊でした。五百二十ページもある分厚いものです。

わたしは、若い時から絵本が大好きで、子どもが生まれるとすぐに、絵本を与えてきましたし、読み聞かせも続けてきました。いつか、本好きな子になれば良いな、と思っていました。息子が小学生になってからも、読み聞かせを続けていて、時には交代読みをしたり、いろいろ工夫もしました。なのに、彼はテレビ好き、工作好きな子だったせいか、五年生になっても、いっこうに自分で本を読む習慣がつかなかったのです。

ところが、この一冊は、彼をすっかりとりこにしてしまいました。「ちょっと難しいかな…」と思ったのですが、読み出したらもうやめられない、本当に面白い本でした。お土産をもらったその日、彼は夜の十時になっても、十一時になっても読み続けて、わたしたちを心配させました。

そんなに面白いのかと、わたしも、夫も続けて読みたくなり、やはり、先へ先へと読みたくなって、夜中まで読み続けたのでした。その後、このシリーズ十二巻をそろえることになって、家族三人、何度も何度も読み返しました。息子はこの一冊から、読書の楽しさに目覚めたのです。この十二冊の本は、ずっと我が家の宝物になっています。

本の中の人物は、まるで家族の一員のように、わたしたちの日常会話に出てきたものです。そのころ、毎日の食卓の話題は、いつもアーサー・ランサムの本でした。とりわけ、ティティと

いう可愛<sup>かわい</sup>い女の子が人気者で、ちょうど、飼いはじめたヨークシャテリアの室内犬の名前にしたのでした。このティティとは、十六年間も一緒でした。

本の中の子どもたちがつくる料理も食卓にのせました。コンビーフとジャガイモで作る、ペミカンケーキという子どもたちのキャンプリは、息子の好物になりました。卵を茹<sup>ゆ</sup>ですぎた時の「鉄卵」という言い回しがおかしくて、息子も夫も、今でも使うのです。

このシリーズは、妹の家族にも弟の家族にも読みつがれて、結局、それぞれ自分たちの宝物として、購入したようです。

本との出会いは、実に不思議なことだと思えます。読む前は、ただの物でしかなかった本なのに、ひとたびその中に入り込めば、中の人物たちが話し、笑い、動きまわって、別の世界に連れていってくれるのです。

ひとたび読書の楽しさを知れば、もう世界は無限大に広がっていく…。それを知った五年生の息子の読書量はどんどん増えたりしました。「英語を勉強して、原書で読めるようになりたい。」とよく言っていましたし、「いつか、本の舞台となったイギリスの湖沼地帯に行ってみよう。」と家族で言い合ったものです。みんなの夢になりました。

わたしは、久しぶりに、「六人の探偵たち」を開いてパラパラとめくっているうちに、いつの間にか読みはじめ、とうとう

深夜の二時まで読み続けてしまいました。息子に電話してみましたくなりました。

上河内町 原田 とき子

## 「本」への想い

「本」というといつも思い出すのは、子どもの頃のことです。

五人兄弟（幼い頃弟が一人欠けて）の我が家では生活も楽とはいえず、なかなか本を買ってほしいとは言いがたかった。私にも読めたものは大人向きの「世界名作全集」だけでしたから、読めない漢字を父に尋ねながら読んでいたものです。

その頃の一番の楽しみは、クリスマス兼お正月のプレゼントでした。十二月二十五日の朝目覚めると、必ず子どもたちの枕元にそれぞれ一冊ずつ本が置いてあったからです。一番年上の私は、真夜中にそと障子が開き、父と母が足音を忍ばせて入ってきて、子どもたちの枕元に本を置いていくのを知っていました。それがいつまで続いていったのかはつきりとした記憶はありませんが、子どもたちがある程度の年齢になるまで続けられていたのは確かです。

両親がどんな思いで、子どもたち一人ひとりにその本を選んできたのかは分かりません。また、何という題名の本だったかも覚えていません。でも、兄弟それぞれが「自分の本」を見つけて、それを抱きしめていた嬉しそうな光景ははつきり覚えています。

今の私は、離れている孫のために、クリスマスプレゼントに本を送っています。

足利市 女性

## 本は心の目薬

あれは、私が小学校五年生の時でした。「学芸会」があったのです。王子様とお姫様がラクダに乗って月の砂漠を旅する踊りです。チビの私はお姫様、スマートな彼女は王子様、学芸会、踊りの花形です。したくは、白いブラウスに、白いスカート、母は白い腰巻きをスカートに縫いなおしてくれました。

ああ、それなのに、踊りを憶えられない私は、おろされてしまったのです。スカートはまた、白い腰巻きに変身したようでした。

下手でおろされた私にも、ちょっぴり同情が集まったらしく、

学芸会に、本の朗読で出場、「ドングリと山猫」の一部分を。

学芸会の当日、母が見えて、帰ってから、「よく読めたね。」とほめてくれました。

なにしろ「出頭すべし」を「であたますべし」なんて読んでいたのですから。誰にもほめられなかったのに、母はほめてくれたのです。

それからというもの、職員室の廊下の脇にあった学校の本を、かたっぱしから借りては母に聞かせました。父は病気で母子家庭、母は、昼間は助産婦、夜は針仕事（着物縫い）。学校の本は、家では買えない子ども向け世界文学全集でした。「フランダーズの犬」は、泣きながら読みました。母も泣いていました。「小公子」「小公女」等は、まるで自分が主人公になっていました。

普通は、親が子どもに読んで聞かせ、本の好きな情緒豊かな子になったなどと聞きますが、逆でした。でも母子のふれあいがあったのです。

「フランダーズの犬」「長靴をはいた猫」本の影響で、犬も猫も飼いたかったけれど、貧しくて飼えなかった長い年月でした。今、ひろった犬は、靴をかくし、夫を吠え、フランダーズの犬にはほど遠い存在。ひろった猫は、長靴もはかず、裸足で庭からカマキリをくわえて、畳の上で大興奮。本の内容とは似ても似つかないけれど、我が家の家族です。

教師になって、図書室の本を親に読んで聞かせる宿題を出し

たこともありました。

今、民話の語りべとして、心楽しくすごしています。「本は、今も昔も心の目薬だべ。」「目薬はな、顔を上にむけてな、目に入れるとすすきりシャンシャン、するんだわ。」

五木寛之って小説家も言ってた!! 体をつくるには、食物の栄養が必要。心をつくるには本からの栄養が必要だって。今は、学校の図書室にも、どんぶらと本があつて、町の図書館にもどつさりあつてさ、いつでも借りられんだよな。

このあいだ三歳の子がよ、「これー。」なんて図書カード出して、絵本かりてた。おつたまげたよ、わっしも「これー。」なんてカード出したら、カード返された。よく見たらデパートのカードだったよ。

「なに、借りたかつて? 『あらしの夜に』 ハラハラドキドキしちゃうから、ごちそうなのにともちで、なかよしなのにおいしそう。」「オオカミとヤギの絵物語六巻シリーズ。ぜったいぜったい読んでみて。感動するよ。家の人にも読んであげて!! 泣くかも?…」

本だいすき。おばあちゃんのおすすめ。



真岡市 柳 徳子

## 父の本

小学校一年生のころであつたらうか。ひとねむりして目覚めた私は、隣室のうすあかりに気づいて起きあがり、襖ふすまをあけた。

そこには電灯を低くして何かを読んでいる父がいた。暗くこごまる父のうしろ姿。母も兄弟たちも寝静まった真夜中の机に一人向かつている父。そのうしろ姿が今も私の脳裏にあつて亡き父への敬慕がつのる。

「読書」などということばを聞くことのなかつた昭和初期。農家のやりくりに多忙な父の深夜のうしろ姿。本屋も書店もない農村で父が読んでいた本。それは、当時の烏山学館（現・烏山高等学校）で学んだ、いわば教科書。黒い表紙、和とじの三冊である。論語、日本外史、史記であつたことが長じてわかつた。それらは常に父の机上にあつて明治の父の宝物のようであつた。漢字だけのそのむずかしい本を子どもたちも貴重な本として、その本のあること、それを読む父のいることが誇りであつた。そして、…本はひとり静かに読むもの…ということも父の無言の教えであつたように思うこのころである。

読書する親の姿、子どもにとって貴重な姿である。

那珂川町 塚原 タイ

## 本との出会い

今から六十年以上前のこと、私が四、五歳の頃だつたと思います。我が家にはたくさん本の本に混じつて、グリム童話集が本棚に入っていました。

はじめてこの本を手にとつたのは、漢字ばかりで書かれているむずかしい本の中に、カタカナで「グリム」という文字があり、これが私でも読めた一冊だつたからです。何が書いてあるのか興味半分、本棚から引き出して中を開いて見ると、ひらがなと漢字で書かれていたので私には、よく読めそうにありませんでした。

その頃、家には学校の教員になつた叔母が時々泊まりにきていました。私はその叔母と話をするのが大好きで、お風呂にも一緒に入つて昔話を聞かせてもらつたり、また講談社の絵本を読んでもらつたりしていました。あの当時よくあきずに同じ本を読みました。

ある時、叔母にグリム童話を讀ませて、夜遅くまで聴いていました。

幼児時代は、両親が共働きだったので、昼間は祖父母と一緒に過ごすことがほとんどで、祖父のひざに抱えられ、祖父が購読していた「キング」の中に掲載されていた漫画を、せがんで読んでもらっていました。

今考えると、その頃にたくさん読んでもらつた童話の中に出

てくる「灰かぶり」「ヘンゼルとグレーテル」「命の水」や、絵本の中の「したきりすずめ」「うらしまたろう」「花咲かじじい」「かぐやひめ」等々のお話から、自然と、正直、親切心、正義感、善悪の判断、家族愛等が育まれてきたように思います。

高校時代は、汽車で片道五十分かけての通学でした。当時汽車の中では、いろいろな本を図書館から借りて友たちと読みあさりしました。当時はテレビのない時代でしたから、新聞や読書は大切な情報源でした。友たちが読んだ本の中からよかつたものを次に借りて読んでみました。

そして本の内容について話し合ったりしていました。自分の考えと同じだったり違っていたり、どうして自分とちがうのか考えたりして、大変勉強になったように思います。同じ本を読んでも、人それぞれ受けとめ方がちがってくるということ、他の人みんなが自分と同じではないことがわかったようでした。

足利市 女性



お母さんが好きな本を

絵本が好きだった私は、子どもたちと一緒にたくさん絵本を読みました。母親になりたての頃に「お母さんが気持ち良いと、赤ちゃんも気持ちが良い。」「絵本で何かを学ばせようなどと思わず、お母さんが好きな本と一緒に楽しんで。」というコトバに出会いました。それはずっと私の子育ての「根っこ」となり、好きな本を好きな時に思いっきり楽しみながら読んできました。

子どもも大きくなり、寝る前の読みきかせをしなくなつてからもうずいぶんになります。今でも時々絵本を見てみると、いつの間にか皆が集まり「ここが良いよね。」「あれ？こんな話だった？」と話がはずみ、小さい頃とは違つた楽しさもあります。

また最近では、子どもが気に入つた物語を紹介してもらい、私も読み、内容について語り合えるようになり、いつの間になんかに大きくなつたんだろうと、嬉しい驚きを感じるようになりました。いくつになつても本を通して親子でつながつていられるんだなあ実感し、これからも、形を変えながらたくさん本に出逢い、夢の世界を広げていきたいです。いつか孫たちと一緒に絵本を囲む日を楽しみに。

足利市 女性

## 読書は耳から

今から五十年以上も前になるが、私が住んでいた所は、田や畑に囲まれた農村地帯であった。農繁期になると、就学前の子どもたちを公民館に集め託児所が開かれた。私の母はそこで子ども世話をする仕事をしていた。小学校低学年であった私は、学校から帰ると毎日母の所へ遊びにいった。そこで、母はよく子どもたちに紙芝居を読んで聞かせていた。私は後ろの方で隠れるように見ていたが、今でも紙芝居の絵と、母の読み聞かせている声が、はつきりと耳に残っている。母の声は、いきいきとして、物語に思わず引き込まれてしまうほど素晴らしく、いつも驚きであった。

その後、五・六年生になって、担任の先生が暇をみてはよく本を読んでくれた。トルストイの「イワンのばか」などとても面白かったが、なによりもその声から読書の面白さを伝えようとしていた先生の気持ちが一番に感じ取っていた。

現在、若い母親たちと一緒に小学校で読み聞かせボランティアをしている。彼女たちが我が子の前で読み聞かせをしている様子を聞くと、微笑ましく素晴らしいと思う。子どもにとつてきつと、母親の姿や声は特別なものとして、一生忘れないであろう。

私は、詩や絵本が大好きである。絵はもちろん好きだが、短い言葉で語られている文章には、たくさんの意味が隠されている。

る。声を出して何回も読んでみると、行間に込められた作者の思いがいろいろと想像でき、広がっていく。

私の読書の原点は、母の紙芝居を読んでいた姿と声である。読書は耳から入ってきた言葉であり、声の響きである。その声の響きに魅せられて、一人でもできる朗読を楽しんでいる。

岩舟町 女性

## 孫との語らい

娘の家に久しぶりに手伝いにいった。孫は中学生最後の夏休みに入り、県大会を目指す部活の特訓。そして来春の高校入試の対策とスケジュールぎっしりの毎日である。

「おばあちゃん、今年の夏は『坊ちゃん』と『西の魔女が死んだ』を読む予定だよ。」

「おばあちゃんは、『西の魔女が死んだ』という本は知らないなあー。」

「読んだら教えてあげるネ。」理系が得意という孫娘との会話である。

余計な話などできないほどの忙しいさ中に、五十歳以上も年のはなれた孫とのこんな短い会話に、私はジーンとくるものを

感じた。

何年か前に留守番にいった時には、手持ち無沙汰ぶさたにしている私に「おばあちゃんこの本おもしろいよ。」と言って「賢者の石」「グッドラック」を手渡してくれた。お互いに本で感じたことをゆったりと話し合って、孫の成長と心の軟らかさを感じたものだった。

孫とは余裕を持って接することができるが、子育ての頃はどつだったのだろう。子どもを寝かせるのによく本を読んであげたことは覚えているが、何を読んであげたかさっぱり思い出せない。「お母さんそこは違うよ。」「また間違えたよ。」と、何度も子どもに脇腹をつつかれたことしか思い出せない。子どもに本を読んであげるつもりが、日中の疲れで眠気におそわれ、朦朧もろもろとなってしまうのである。そんなことを娘は覚えているのだろうか？それとなく聞いてみた。

「うん。中でもあの本が好きだったので思わず子どもに買ってあげたよ。」と言う。

そうそうそんな本があったっけ。今でもボロボロになって本棚の片隅にある。何処どこで買ったのだろうか？…。あの頃の私は、本屋さんのぞくゆとりさえなかった。あの本はきつと練馬の兄嫁の手土産でいただいた物だったように思う。

本好きな子どもになって欲しいと願いつつ、強い眠気と戦いながら一生懸命に子どもに本を読んであげたことが、孫とのさやかな会話につながったように思う。昔の苦勞に、今褒美を

いただいた思いである。

時間が確かに自分のものになった今、孫とはもちろんのこと年代を超えた本好きの人たちと何歳になっても語り合つことができるように、これからも読書を続けてゆきたいものと思う。

佐野市 女性

### 家族の優しさ

どうしようもない悲しみに、さいなまれた時、読書によって救われたのでした。振り返って見れば、二十三年前のこと、自覚症状がなく、健康診断のつもりで病院へ行つたところ、医師は検査の結果を見て、すぐに入院、手術と言つたので、びっくりしたのは、当の本人、私でした。その時、涙がとめどなく流れ、たとえようのない不安な気持ちでいっぱいでした。自然に「惜命」、私のこの命がいとおしく思われました。

主人と息子は、生活が一変してしまいました。不便なことは一言もいりませんでした。ただ病院へ来る毎に、何冊かの本を持ってきてくれました。病気に関する本、心が慰められる本、料理の本、等々でした。

私は、ただ病気が治り、普通の生活ができることを祈るばかり

りでした。そして、一命を取りとめ、無事に退院できたときは、とても嬉しかったです。現代の医学と医師の方々、看護師とスタッフの皆様に感謝するばかりでした。

退院した後、今度は、通院しながら、投薬、検査、リハビリ、の繰り返しが続く、あたかも病気の戦いでした。その時、主人と息子は「退院おめでとつ、よかつたね。」と言ったものの、気の利いた励ましの言葉もなく、男ゆえにこまごまと手伝ってくれるわけもなく、ただ読書を勧めるだけでした。

書物からの知識がいかに多かつたか、今になって、つくづく思います。本との出会いは著者との出会いであり、人とのつながりでした。知らず知らずに思いやりの心が芽生え、心の寂しさを満たしてくれるものになっていました。また、書物から、「過労死」ということを知り、十年以上勤めていた幼稚園を辞めました。その後労働条件が変わり、土・日曜日が休日となったので、どれ程うらやましく思ったことか知れませんが。

今でも、主人からのプレゼントは本です。息子は就職して、遠く離れています。帰省する時の土産は「お母さん、この本、読んだ？」と言って、何冊かの本です。家族のやさしさは、さうとした関係で、とても心地よく感じています。

その後、図書館で「絵本の読み聞かせ」をやらせていただいています。子どもたちとのふれあいはとても楽しく、人生の宝物です。絵本を通して共感したり、時間を共有したりすることで、生きる喜びを感じています。

上三川町 小林 シゲ

### 孫に読み聞かせをして

私の娘は子宝に恵まれ、二男一女を授かった。私にとって三人の孫は、生きる支えともなっている。

孫たちには、豊かな心を持ち元気にたくましく成長して欲しいと願い、絵本の読み聞かせをしてきた。孫を膝の上に抱き、食べ物の絵本や「いないいないバー」の絵本を見せては「おいちいおいちい。」「いないいないバー。」と何度も読んで遊んだ。

二人の男の子は、成長に伴い動物や虫、乗り物の絵本が大好きになった。動物や虫の絵本は「可愛い可愛い。」と一緒に手で撫でながら読んだ。戸外に出ると虫や蛙を追い駆け、捕まえては手の上に乗せて遊び「有難う。また遊んでね。」と言って草むらに逃がしてやった。

ある日、孫たちを連れて公園に行った。二人の男の子は、虫を追い駆けて遊び始めた。四歳の子は、バツタを捕まえて大喜び。逃げようとするとバツタ、逃がすまいとする孫。そうこうしているうちにバツタは、孫の手に片脚を残して逃げてしまった。その脚を見て驚いた孫は、駆けてきたかと思うと私の胸に飛び込んで顔を埋めた。悪いことをしてしまったと思ったのだらう。私は、黙って頭や背中を撫でた。そばで見えていた娘が「これからは気を付けようね。」とやさしく言うと、孫はほっとしたのか、また虫を追い駆けて遊び始めた。

二人の男の子は小学生となり、我が家にお泊まりするのが大好きで、寝る時は絵本をそれぞれ三冊も四冊も抱えてくる。「一冊ずつね。」とは言つもの、三、四冊は読むことになる。読み終わるとお話を催促されるので昔話等をする。私が疲れている時は、適当に話を省略すると、「そこは違うよ。一つだよ。」と言つて孫が話を続ける。私は、ウトウトしながら話を聞いている。最後に子守歌を歌う。「ねんねんころりよ。」と歌っているうちに静かな寝息が聞こえてくる。やんちゃ盛りの二人の男の子も絵本を聞いている時は、何とも素直な良いお顔となっている。私にとっては、至福の一時となる。

今では、小学校で朝の読み聞かせのボランティアをしている。子どもたちは、楽しみに待っているとのことで、私にとっては人生の宝となっている。

私は絵本の不思議な魅力に引かれ、読み聞かせの奥の深さを知り、経験を積んでさらに学んでいきたいと思っている。

鹿沼市 女性

